ISSN. 0910 - 4674

岡山地方史研究

2025.12　167

論文
大正期の高梁川改修工事における行政と地域社会（上）
…… 森　元　理　稀（1）

歴史随想
第十七師団の全景写真について
…… 山　下　　洋（25）

博物館・展覧会めぐり
真庭市蒜山郷土博物館を訪問して
…… 東　野　将　伸（27）

読書日記
池田俊彦著『玉島湊の茶室群』（吉備人出版、二〇二五年三月）
…… 門　利　博　子（29）

編集後記 …… （30）

岡山地方史研究会

感じて心に残った。

茶道の知識がなくても、建築や歴史的背景の解説がわかりやすく興味深く、茶室内部の写真画像はさることながら、平面図も作図されており、茶室の全貌がイメージしやすい工夫も凝らされている。そして岡山大学橋田研究室によって茶室群地図も作図されており、どの辺りにどれほど茶室が密集していたかを大まかにつかむこともできる。

また藪内流宗家家元十四代藪内紹智氏へのインタビューも掲載されている。藪内氏は福井工業大学で木造建築を本書の著者である池田俊彦氏に学んでいる。インタビューでは、学生時代の池田氏とのエピソードのほかに玉島に現存する茶室についても言及している。茶室は、藪内家の茶室「雲脚」や「燕庵」の意匠に影響を受けて建てられたと思われるものが多いが、藪内氏によると、基本的な設えは伝わりながらも、忠実に模すというよりは、玉島の気候や風土に根差した創意工夫がみられると評価している。建築学を学んだ家元らしい指摘が興味深いと思った。

藪内流は、「町衆茶道」に対し、大名や武家に伝わった「武家茶道」に分類される。玉島で裕福な商人が藪内流を好んだのは、この時代には武家茶道のほうが一般的だったからと考えられるが、なぜほかの武家茶道ではなく、藪内流だったのだろうか。

同じく掲載されている茶道史家井上秀二氏のコラム「玉島の茶人」によると、なぜ玉島に藪内流が普及したのかを示す明確な史料が見つかっていないという。藪内流が地方に普及した方法として、西本願寺の浄土真宗信仰の布教活動と、裕福商人らの茶技愛好熱によるものがあり、玉島は藪内家所蔵の『桂隠斎門人姓名記録』から後者と考えられるという。この記録では、文化三年から天保十三年にかけて、玉島地区からは二十三人が入門している。併せて井上秀二氏の「備中南部と児島の藪内流茶道」（『倉敷の歴史　―倉敷市史紀要―　第六号』、平成8年）も確認してみたところ、この期間中、玉島地区で最も入門が多かったのは、文化三年で十三人だった。倉敷地区では、同年の入門者は五人で、古禄も新禄も名を連ねており、天保期には新旧勢力が茶を通じた交流もあったという。

再び私事に戻るが、茶道を習いたくてもなかなか茶道教室が見つからず、今の先生と出会うまでに一年以上かかった。あとからわかったのだが、茶道教室は徐々に減っているという。そもそも新規で茶道を習う人が減っており、また教える人も高齢化が進んでいることが理由として挙げられるとのことだ。茶室が閉じられるのは、使う人が減っていることも一因としてあるかもしれない。そんな今だからこそ、所有者の方々が、調査のために自宅の茶室の撮影などに協力され、その成果として本書が出版されているのは大変意義深いと思う。今後もこれらの調査結果をもとに新しい発見や展開が生まれる期待が持てる内容だった。ご関心のある方はぜひご一読いただきたい。

岡山地方史研究・一六七号・二〇二五年一二月一〇日
発行・岡山地方史研究会　代表・山本太郎
事務局・岡山市北区伊福町二―一六―九　ノートルダム清心女子大学文学部　久野研究室気付・小野功裕
TEL　〇八六―二五二―二四八二
編集局・岡山大学文学部日本史研究室気付・東野将伸
印刷・友野印刷㈱・岡山市北区高柳西町一―二三
TEL　〇八六―二五五―一一〇一㈹